

## 「ああ暑い、それは太陽のせい」 —— 熱帯気候における白人の身体<sup>1</sup>

The Sun...is the foe whose assaults we have first to ward off.<sup>2</sup>  
...c'était à cause du soleil. (「それは太陽のせいだ」)<sup>3</sup>

石 塚 久 郎

### イントロダクション

気候は人を作る、いや人そのものを作り出し、作り変えさえする。エアコンがきいた快適な生活空間に住まう現代の私たちからすれば、気候が身体に与える影響がいかほどのものか肌で感じることは難しいかもしれない。気候は、食餌（ダイエット）や性（セックス）といった身体に直接働く生物学的系列に属さない、外的な（したがって従属的な）要素に見られがちであるし、遺伝医学が飛躍的に発展しつつある 21 世紀にあっては、どうも環境（＝気候）は分が悪い。しかし、歴史的に見れば「気候が人を作る・変える」というディクタムはある時期までは非常に強く信じられていた。<sup>4</sup> 近代以前の人々の限定的な移動空間を考えてみればいい。たいていの人は生まれた土地

---

<sup>1</sup> 本稿は、平成 24 年度専修大学研究助成「大気のパソロジー——イギリス近代における気候と身体」の研究成果の一部である。

<sup>2</sup> Julius Jeffreys, *The British Army in India* (London, 1858), p.39

<sup>3</sup> Albert Camus, *L'étranger* (Paris: Gallimard, 1942), p.156 (アルベール・カミュ、窪田啓作訳『異邦人』(新潮文庫、平成 7 年)、107 頁；邦訳はこれに従う。)

<sup>4</sup> 真っ先に思い浮かぶのは、モンテスキューの『法の精神』であろうが（「気候の帝国はすべての帝国のなかで第一のものであり、最強のものである」）、彼の気候理論は環境主義的パラダイムの長い歴史の一部に過ぎない。18 世紀までの気候環境と身体との関係についてはグラッケンの古典的名著を参照。Clarence J. Glacken, *Traces on the Rhodesian Shore: Nature and Culture in Western Thought from Ancient Times to the End of the Eighteenth Century* (Berkeley: U of California P, 1967)

から離れずそこで暮らし続けたはずだ。生まれた土地の空気を吸い、その水を飲み、そこで作られる食物を食べ生きていた。彼らの身体はその土地（気候）によって醸成される。移動することがまれであった近代以前の社会において人と土地とを結ぶ絆は強い。彼らにとって場所を移動することは、まさに生死にかかわること、少なくとも身体に生理学的変化をもたらすものであった。気候はここにおいて、外的ではあるが、身体を変更・改変するほど非常にかつ直接的に外的である。身体はダイエットや運動などで主体的に改変されるのではなく、空間を移動するだけで変更を被ってしまう。近代以降でこの身体改変の経験が顕著に見られるのは、白人が熱帯地域へ移動した時である。特に灼熱の太陽が支配する酷暑熱帯気候への移動は、温帯気候に順化した白人にとっては危険極まるものであった。19世紀半ばの軍医ジュリアス・ジェフリーズが言うように、熱帯気候の「太陽は敵であり、その襲撃を我々は最初にかわさなければならない」。

本稿は、このような「気候と身体」との関係を、特に熱帯地域における白人の敵である「太陽」に帰される二つの疾病、「熱帯性（神経）衰弱」と「日射病」に焦点をあわせ、更に二つの文学テクストを読み重ねることで、歴史・文化的視座から捉えようとするものである。第1部では熱帯気候における白人の気候順化の問題を取り上げる。植民地政策と領土拡張政策が台頭する19世紀のヨーロッパ人にとっての難題は、熱帯地域に白人がその人種的属性を保持しながらどう生きながらえるかにあった。気候による白人の身体改変は、主に「順化」という問題系をめぐって闘わされる。第2部では、日射病に焦点を合わせ、その歴史をひもとく。19世紀になって本格的に日射病が医学の言説に登場する。19世紀末から20世紀前半にかけて、熱から光へと比重が移ったことにより、太陽に新たな恐怖が加わる。更に太陽は狂気と犯罪とも手を結ぶ。最後にカミュの『異邦人』（1942）をかくなる「太陽」の観点から読み解く。

近代以降、欧米にとって熱帯地域は植民地化の対象となったことを考えれば、気候と身体の問題系は植民地主義や帝国主義の問題系にも及ぶ。身体史の観点からすれば、後者の問題系においてもっばら「他者」の身体が分析対象とされたのに対して（例えば、人体測定学や骨相学、犯罪人類学を想起）、

ここでは白人の「自己」の身体が主要な分析の対象になる。植民地支配に利用され得る「他者」の身体に対する医科学的・文化人類学的関心はなるほど重要ではあるが、現地の白人たちが抱えていた自己の身体に対する懸念と不安も同様に重要である。本論のハイライトは、かくなる自己の身体への不安と身体改変の主體的経験とその表象を二つの文学テキストに読み込むことだが、そのお膳立てとして長い前置きが必要である。その道筋を通してはじめて『異邦人』において何故ムルソーが殺人の動機を太陽に帰さなければならなかったのか理解されるだろう。

## 1. 熱帯気候と「気候順化」する・できない身体

### 熱帯の両義性——魅惑と恐怖

熱帯地域が北ヨーロッパ人に「発見」されて以来、その無尽蔵とも思われる自然の恵み、動植物の驚くべき色彩とその多様は人々を魅了した。人的労働が不要と思える熱帯の自然の豊饒さとその産出力は、飢餓やペストから滅多に逃れることができなかつたヨーロッパから見れば楽園そのものであった。いささか息苦しいヨーロッパの文明社会から逃避できる「熱帯の島エデン」という好意的な神話イメージを人々の心に植え付けた。<sup>5</sup> その証拠に、18世紀前半に西インド諸島を訪問した医師ハンス・スローンも熱帯気候が特に不健全なものであるとか白人に脅威を与えるものとは見ていない。<sup>6</sup>

ところが、18世紀も半ばになると、これとは相反する見方——「酷暑熱帯」——が台頭する。17世紀末から徐々に顔を出してはいたのだが、病は「場所」（とりわけ瘴気）から生じるという18世紀の「環境医学」（environmental medicine）の考えと相まって、熱帯地域は疫病を生みやすい危険な気候と結び付けられる。致死的な熱病、黄熱病や赤痢などの疾病は高温多湿な熱帯気

---

<sup>5</sup> David Arnold, *The Problem of Nature: Culture and European Expansion* (Oxford: Blackwell, 1996); デイヴィッド・アーノルド『環境と人間の歴史——自然、文化、ヨーロッパの世界的拡張』飯島昇藏・川島耕司訳（新評論、1999年）、8章「熱帯性の創出」参照。

<sup>6</sup> アーノルド、197–200頁；Philip Curtin, *The Image of Africa: British Ideas and Action, 1780-1850* (Madison: U of Wisconsin P, 1964), vol.1. pp.58 ff.

候のなかでこそ発生しやすい。<sup>7</sup> 18世紀半ば以降、熱帯地域への領土拡張が活発になるにつれて、現実の熱帯気候が白人に与える致命的な影響（圧倒的な致死率の高さ）を目の当たりにしたヨーロッパ人は、ますます熱帯を否定的な目でみるようになる。実際、何万もの兵隊が疫病で命を落としていった西アフリカは「白人の墓場」とさえ呼ばれたのだった。<sup>8</sup>

肯定的なイメージから否定的なイメージへと緩やかに変遷していくように見えるが、(特に18世紀半ば以降は顕著である)、この相反する二つのイメージが共存していたことも事実である。ロマン主義においては熱帯は異国情緒風に味付けされ、例えば、ドイツの博物学者フンボルトは南アメリカを審美的な観点からその魅惑を描出した。<sup>9</sup> 19世紀以降もこの共存はある程度継続する。

### 「気候順化」という難問——熱帯気候と白人の身体

東インド、西インド諸島、北アフリカ、西アフリカ、あるいはオーストラリアといった熱帯地域へ北ヨーロッパ人が移動し生活をする（ないしはその土地の人を支配する）場合の一番の難題は「気候順化」である。簡単に説明しよう。熱帯地域に移動した白人は酷暑熱帯という慣れない気候に不意打ちを食らう。多くの人々は土着の病に襲われ衰弱し、時にはミッションを遂行することなく死んでいく。ところがある一定の割合で生き残れる者たちもいる。彼らは熱帯の気候に「順化」したのだと考えられた。驚くことに、19世紀初頭までは、ヨーロッパ人はその高い死亡率にもかかわらず、身体の健康に関してかなり楽観的な考えをもっていた。熱帯地域である期間生き続ければ、本国にいるのと同じ程度健康で長生きできると考えられていたのだ。その背

---

<sup>7</sup> アーノルド、201頁；Mark Harrison, *Climate and Constitutions: Health, Race, Environment and British Imperialism in India, 1600-1850* (Oxford: Oxford UP, 1999), p.63.

<sup>8</sup> Philip Curtin, “The White Man’s Grave: Image and Reality, 1780-1850”, *Journal of British Studies* 1 (1961): 94-110; idem., *Death by Migration: Europe’s Encounter with the Tropical World in the Nineteenth Century* (Cambridge: Cambridge UP, 1989); アーノルド、129頁。

<sup>9</sup> フンボルト『自然の諸相——熱帯自然の絵画的記述』（ちくま学芸文庫、2012年）；アーノルド、193-94頁。

後にあったのがこの「気候順化」(acclimatisation) ないしは「気候順応」(seasoning) という考えである。18世紀半ばには「気候順応」は「順化」と同等視されるようになるが、語源はどうあれ、それが、異なる季節のサイクルに身体を慣らすことで気候に慣れることを意味するようになったことは明白である。<sup>10</sup>

順応するためにはその土地の疾病に早い段階で罹らなければならない。「順応のための疾病」(seasoning sickness) とも呼ばれたマラリヤなどの土着の病によって洗礼を受ければ、免疫が作りだされ、その後の生活も比較的安全に送ることができる。<sup>11</sup> 順応のプロセスを補助するためにすすんで人為的手段をとる必要があるとする医師もいた。瀉血とダイエット(食餌法)がその主な手段となる。多血質の気質をもつヨーロッパ人が首尾よく順化するには瀉血によって多血質の血をあらかじめ抜き、土着の血に変える必要がある。血は摂取される食物から作られるのだから、その土地の食物をとること(ダイエット)はヨーロッパ人の血を土着の血に変える助けとなる。更に、産地の食物から作られた血は土着の病に抵抗力をもつという考えもこの補助手段を後押しした。<sup>12</sup>

このような気候順化に対する楽観主義の背後にあるのは、ファイバー理論を基盤とする可塑的な身体観である。ファイバーとは身体を構成する最小単位であり身体は無数の繊維(ファイバー)によって織りなされる。そして、身体や精神の「気質」(temperament)はこのファイバーの特質や構成(織りなし方)によってある程度決定される、というのがファイバー理論である。<sup>13</sup> いかなる土地や気候にも柔軟で可変的なファイバー身体があれば対応できる。それは伸縮自在なのだから。原理的にいって、熱帯地域に移動し可変した身

---

<sup>10</sup> Harrison, pp.44-45, 88-89.

<sup>11</sup> Curtin, p.83; Harrison, p.76.

<sup>12</sup> E.M. Collingham, *Imperial Bodies: The Physical Experience of the Raj, c.1800-1947* (Cambridge: Polity, 2001), p.25; Curtin, p.83; Harrison, p.47; Karen Ordahl Kupperman, "Fear of Hot Climates in the Anglo-American Colonial Experience", *William and Mary Quarterly* 41 (1984), p.227.

<sup>13</sup> より詳細については以下を参照。Hisao Ishizuka, "'Fibre Body': The Concept of Fibre in Eighteenth-century Medicine, c.1700-40", *Medical History* 56 (2012): 562-84.

体は、再び温帯地域に移動すれば時間はかかるが以前のような身体（気質）に戻るはずである。しかし、これは理論上の話であるという点に加えて、実際問題として現地に残り生活し生殖行為を行い次世代を作っていく白人たちはどうなるのか、という問題は残る。熱帯の地インドを征服したとしてもイギリス人という特質はまさに気候の力によって奪われ「インド化」するのではないか。ポルトガル人を見たまえ、何世代にもわたる生殖行為の果て、気候と風土に順化したその子孫は今やポルトガル人の本来の特性を失ってしまっているのではないか。<sup>14</sup> こうした人種の「退化・劣化」(degeneration)への不安は、18世紀の人種という概念が近代的な本質主義的なものとは異なる曖昧模糊とした概念であっただけに十全に前景化することはなかったが、次の世紀に開花する問題の萌芽としてくすぶっていた。

気候順化の楽観視から気候順化不可能という悲観主義への移行の顕著な例は、19世紀初頭に活躍した軍医ジェイムズ・ジョンソン (James Johnson, 1777-1845) の『ヨーロッパ人の身体への熱帯気候の影響』(1813)に見られる。<sup>15</sup> 19世紀前半の熱帯医学のバイブルとなるこの書物においてジョンソンは、ヨーロッパ人の身体が熱帯気候に順化することは困難であるとした。ヨーロッパ人の肌色 (complexion) は2世代3世代を経て、場所が変わるだけで (つまり気候が変わるだけで) 土着民のような色に変わるだろうかという問いに、「断固としてない」と彼は断言する。それでは、あの人間の優れた可塑的な身体性はどこへいったのか。

The truth is, that the tender frame of man is incapable of sustaining that degree of exposure to the whole range of causes and affects incident to, or arising from vicissitude of climate, which so speedily operates a change in the structure, or at least, the exterior, of unprotected animals.<sup>16</sup>

---

<sup>14</sup> Harrison, p.102.

<sup>15</sup> James Johnson, *The Influence of Tropical Climates on European Constitutions* (London, 1813; 3<sup>rd</sup> ed. New York, 1826)

<sup>16</sup> Johnson, p.9

ヨーロッパ人の「か弱き身体」は自由自在に可塑的であるどころか、強く熱せられればガラス細工のように溶解するか破裂するかだ。18世紀的な可塑的身体は称賛すべきものというより「脆弱なもの」とされる。

ジョンソンのような悲観主義的立場の背景として、同時期に本質主義的人種観が登場したことも関連がある。ここでは詳細を述べることはできないが、いわゆる「人種の転換」(racial turn)が行われる時期が19世紀初頭と言われる。<sup>17</sup> 人種の違いは何よりも、生物学的・生来的な特徴、変えることのできない特徴に求められるようになる。神はそれぞれの人種をそれぞれ適合する気候にそって作られたのだから、それぞれの人種は特定の環境(気候)にのみ耐え得るのであり、そこから外れれば身体はもたないと考えられた。<sup>18</sup> 以前からくすぶっていた順化不能の不安が本質主義的人種観へ拍車をかけ、新たな人種観が順化の悲観主義的見方を支えるという相互作用のもとに、不可逆的身体観が身体の可塑性に取って代わる。

とはいえ、悲観的といっても物事を裏面から見れば見え方も変わる。人種的な観点からすれば、肯定的にもなり得るのだ。熱帯気候に晒された白人が、例えばインド人と同じ身体特徴を持つに至るのかという問いに、元々違う人種なのだから「インド人化」はあり得ないと肯定的にノーと答えられるからだ。<sup>19</sup> 白人だからこそ熱帯気候にもろく、ある意味、気候順化に失敗し病に倒れるのは元々その気候に適合しない身体を持つヨーロッパ人の証ともいえるのだ。しかし、もう一方で(堂々巡りになるが)、ジレンマも抱えることになる。十全に順化できなければ植民地化も入植もできない、インド化されない代わりに領土拡大や領地支配にも支障が生じる。このジレンマを解消する手立てはそれほど多くはない。一つは、でき得る限り温帯気候に近い特別な場所(ニッチともなる場所)を探し、白人をそうした比較的健康的な場所に「隔

---

<sup>17</sup> H.F.Augstein (ed.), *Race: The Origins of An Idea, 1760-1850* (Bristol: Thoemmes P, 1996); Michael Banton, *Racial Theories* 2<sup>nd</sup> ed. (Cambridge: Cambridge UP, 1998).

<sup>18</sup> David N. Livingstone, "Human Acclimatisation: Perspectives on a Contested Field of Inquiry in Science, Medicine and Geography", *History of Science* 25 (1987): 359-94; idem., "The Moral Discourse of Climate: Historical Considerations on Race, Place and Virtue", *Journal of Historical Geography* 17(1991): 413-34.

<sup>19</sup> Harrison, p.17.

離」させることだ。このような白人のための「エンクレーヴ」（飛び領土）は「高原避暑地」（hill stations）などに見出され、学校などもその土地に建てられた。（同時に、不衛生な熱帯の環境をテクノロジーで変えるという手段もあったが、これにはかなりの時間と労力がかかる。）もう一つの解決法は、土着の人々の風習を模倣することである。実際、インドの人々の衣食住における慣習や習俗は 19 世紀初頭まではイギリス人が真似すべき手本となっていたが、19 世紀が進むにつれてインド文化への侮蔑の念が強まり、この手段は捨てられる。<sup>20</sup> つまり、熱帯気候に適応するのは順化を通してではなく、白人の保護壁となるものの創造を通してなのである。熱帯の「気候」は如何ともしがたい、ならば、白人の「環境」を作り変えるしかない、作り変えられるべきは白人の身体ではなく環境である、という訳だ。

このような状況のなかで、「順化」に対する意味づけも変化する。18 世紀までは例えばインドに順化することは「インド化」（Indianisation）と同義であり、徐々に土着の人々の特徴を獲得していく称賛すべきものであったが、ジョンソン以降は異人種間の混合婚と同義として捉えられるようになる。ジョンソンが言うように、「移住した全てのヨーロッパ人の子孫はその土地に永住するなら、徐々に退化していくことは疑いようがない。」<sup>21</sup> 端的に順化は「退化」なのだ。長く滞在したとしても疾病に対して免疫ができる訳ではない。それどころか、ヨーロッパ人の身体はそれだけ気候の悪影響に晒され病にかかり易くなる。「気候は人体をまさに劣化させる。・・・心身の健康はゆっくりと、恐らくほとんど感じることなく影響を被る。劣化と退化のこの過程は進んでいく。別の気候に移動してその流れを止めない限り将来にわたって進むだろう。」<sup>22</sup> 順化できない身体に伴う退化への根深い不安は世紀後半になるにつれて増大する。

---

<sup>20</sup> David Arnold, *Colonizing the Body: State Medicine and Epidemic Disease in Nineteenth-Century India* (Berkeley: U of California P, 1993); Collingham, p.82ff; Harrison, pp.218-19.

<sup>21</sup> Harrison, pp.219-20; Johnson, p.10.

<sup>22</sup> Edmund C.P. Hull, *The European in India or Anglo-Indian's Vade-Mecum.....; to which is added A Medical Guide for Anglo-Indians*, by R.S. Mair, 3<sup>rd</sup> ed. with additions (London, 1878), pp.221-22



## 血と退化と気候

世紀が進むにつれ、順化の難題は個人レベル（一世代）の問題ではなく、その子孫にまで及ぶ、種族（race）に関わる問題として認識されるようになる。太陽を白人の第一の敵と見なすジェフリーズは、既に 19 世紀半ば過ぎに気候順化の過ちを指摘し、何世代にもわたり熱帯の太陽の熱によって焼かれ煮られ炙られたヨーロッパ人が「アジア化」する様を次のように述べる。

When therefore it is proposed that the Englishman shall inure himself to the climate of India by bravely exposing himself to it, the work of generations is attempted to be effected at once; a work which, by the time it was thoroughly complete in the constitutions of his few surviving descendants, would have simply *re-transformed* them into Asiatic, stewed and torrefied under the same skies which have gradually concocted the Indian.<sup>23</sup>

続けてジェフリーズが言うように、その時には種族に何の優劣もなくなってしまうのだ。

ヨーロッパ性（ないしはイギリス性）という種族のアイディンティの喪失は、子孫の存続と「血」の純潔性といった問題につながられる。熱帯の熱によって女性の生殖能力が低下し病弱な子供が生まれる。その性格も好戦的だがままである。（『秘密の花園』のメアリーを思い浮かべればいい。）この時期にインドにおけるイギリス人の子供の教育管理に配慮すべしとする指南書が「インドにおけるヨーロッパ人もの」と同時に大量出版されたのも偶然ではない。<sup>24</sup> 例えば、このジャンルの著者の一人ハルは、熱帯気候に長く滞在したものは「精神的にも肉体的にも劣化し」、もしそこで子供を産むなら、その子供は「心身ともに脆弱」であり、「蒼白な顔と弛緩した体」を持つことになる、そうした子供たちは温帯地域に移動しなければ、「3 世代後には、インドにおいて純血なヨーロッパ人、すなわち、正真正銘なにも混じらない血

---

<sup>23</sup> Jeffreys, p.42.

<sup>24</sup> Collingham, pp.90, 98; Harrison, pp.143, 219.

(pure, unmixed blood) をもつヨーロッパ人を見るのはまれになるだろう」<sup>25</sup>と指摘する。(彼はこの点においてのみ、インドの大地を植民地化するのは間違いであるとする。)何も混じっていない血とは異種族間の婚姻による「混血」を示唆するものとも読めるが、文脈からして気候そのものによって血が不純なものに侵されるというニュアンスの方が強い。ここで気候と血とは交換可能なものとして現れる。リチャード・バートンはゴヤのポルトガル人が今や「退化」していることについて次のように言う。

They [Portuguese in Goa] presently degenerate, from the slow but sure effects of debilitating climate and its concomitant evils.... There is no mixture of blood, still there has been one of air and climate, which comes to the same thing.<sup>26</sup>

気候による混合は混血と同等なものとなされ得るのである。

この時、以前には順化の過程として推奨された血の希薄化（瀉血によるものであれ、熱病によるものであれ）は、かなり疑わしい目で見られる。ジェフリーズがいうように、血の希薄化や血の質の劣化は急性の炎症などにかかる可能性を低くするかもしれないが、「このように血が劣悪になるのは、順化の劣った姿である。」<sup>27</sup> また、サンボン「貧血」(anaemia) になることが順化の証であることを戒める。「熱帯における貧血」を「自然で予防的な状態だと考える著者がいる」。彼らは「新参者を瀉血によって貧血状態にしようとさえする」が、「熱帯の貧血はヨーロッパの貧血と同じように血の病的状態なのだ」。<sup>28</sup> 血の希薄化あるいは血の質の劣化は熱帯気候に長く晒されることから生じるが、熱帯性の貧血は今や人種の退化を示唆するものとなる。

では、実際に熱帯気候に移動したヨーロッパ人は、気候による身体改変の

---

<sup>25</sup> Hull and Mair, p.221.

<sup>26</sup> Richard Burton, *Goa and the Blue Mountains* (London, 1851), p. 89, cited in Harrison, p.125

<sup>27</sup> Jeffreys, p.49

<sup>28</sup> L.Westenra Sambon, "Acclimatisation of Europeans in Tropical Lands", *The Geographical Journal* 12(1898),p.590

経験をどのように感じ、どのように描いたのだろうか。ここではラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904) (小泉八雲) の西インド諸島でのヴィヴィッドな身体改変の経験を見てみる。

### ハーン「思案は禁物！」

ハーンは 1887 年の夏、小アンチル諸島を旅している最中マルティニーク島に上陸するが、その島に魅惑され 2 年もの間滞在することになる。その旅行記が 1890 年に『仏領西インドの 2 年間』としてまとめられる。<sup>29</sup> ハーンは 1890 年に日本を訪れ帰化することになるだから、後から見れば、西インド諸島滞在の経験は日本へ帰化するための準備体操とも見られよう。もっとも、かなり過酷な準備体操ではあったが。

この旅行記に収められている「マルティニーク小品集」のなかで気候順化の主観的経験を最も見事に描出しているが「思案は禁物！」である。ハーンはそこで、熱帯に対するヨーロッパ人の夢や魅惑、その幻滅、凶悪な気候の力とその力による自己の身体の生理学的変化を克明に記す。

ハーンの第一印象は熱帯の魅惑と「太陽」の魔法である。というのも、熱帯で目にするものは全て現実離れしているからだ。美しさのなかにあるあの奇怪な感じはフランス語の *frisson* という言葉(失神するほどの戦慄の云い)がうまく言い当てている。熱帯世界は子供時代に読んだ魔法の物語のようであり、「じっさい、魔法だ。ただしその魔法は、あの偉大な魔法師「太陽」の魔法だ。」(100-1) ハーンは「私」を主語にするのではなく「みなさん (you)」を主語にして語りかける。「みなさん」は熱帯の美しさの魔法にかかる。海洋のあやしい催眠力、色と光の地帯を支配している大自然の妖術、そうしたものに魅了されるのだ。(106-7)

ところが、実際は理想とはだいぶかけ離れていることを知るようになる。熱帯の熱が徐々に魔法を解きほぐく。常夏の国からの効果は肉体的な愉楽で

---

<sup>29</sup> Lafcadio Hearn, *Two Years in the French West Indies* (1890; rpt., Interlink Books, 2001); 小泉八雲『仏領西インドの 2 年間』上下、平井呈一訳 (恒文社、1976 年) 訳と引用はこれに従うが、一部訳を変更した。「思案は禁物！」は下巻に収められている。

あり、本国の夏の延長のようなものと考えられるかもしれない。ものの本で熱帯地域の疾病や風土も学びどんなものに注意したらよいかもよくご存じだろう。そしてあの熱帯の白人に特有な「衰弱」も。「熱帯の白人が一人のこらずかかるあの元気消耗（*enervation*）は、あれは一種の快適な疲労感——つまり、肉体的努力がよそよりもいらぬ土地での努力に対する一種の苦痛なき嫌悪……ぐらいに解しておられたことだろう。」(108) 身体の消耗・衰弱は精神にはむしろ好ましいことで、知力は熱帯によって刺激をうけ強力になり、頭脳を明晰にするとう違ひされているかもしれない。みなさんは最初のうちは騙されているのである。(109)<sup>30</sup>

ハーンが描きだすのは、後に「熱帯性神経衰弱」と定式化される熱帯気候による一群の心身の衰弱症状の経験である。強靱な体をもつと誇るヨーロッパ人ならこんな元気衰弱もじき慣れるだろうと自惚れているが、段々と分かってくるのだ。何か普通とは違う変化が体に起こりつつあると。「しじゅう頭が重いと言う感じが日ましに目立ってきて、やたらに休息をとらなくては行かない——同時にまた、大気の変動や、味、臭い、快不快に対して、妙に神経が高ぶる、——そんなことに徐々に気がつくようになってくる。」(112) それでも高を括った外国人はただの疲労衰弱ぐらいにしか思わない。気候順化の困難とアボリアがあればほど唱えられていたのに、民衆レベルではそれも意に介していなかったことが分かる。実際には、身体を変更するほどの、そして人種の特徴を変えてしまうほどの「修正」がほどこされている。

そこまで行っても、外国人は、まだこの熱帯の気候の毒気が——2代たてば人種の特徴を変えてしまう (*remodels the character of the races*) 熱帯の気候の凶悪な力というものが、十分にわからないのである。気候の力は骨格の形を変え、——光の横溢から目を守るために眼窩をくぼませ、——血液を変形させ、——皮膚を黒くするのである。最初何ヶ月かの神経的修正 (*nervous modification*) をつづけていくと、そのあとにはさらに重大な修正と変化が生じてくる。——体力の

---

<sup>30</sup> Cf. Robert W. Felkin, "Can European become Acclimatised in Tropical Africa?", *Scottish Geographical Magazine* 2(1886): 647-57.

喪失とともに、それに相応する以上の精神力と精神活動の減退がおこってくるのである。(113-14)

気候の凶悪な力は白人の身体を根こそぎ修正する。しかし、修正は身体レベルにとどまらず精神の領域にも達する。熱帯性衰弱により神経の修正を被った白人は記憶が麻痺し理性の働きもままならない。読書にも身が入らず、勉強しようとしても、今まで経験したことのない痛みがこめかみ、目、脳の神経中枢を襲い、頭がどんよりして麻酔薬にまけたように眠り込んでしまう。(114) こうしてハーンは、圧倒的な熱帯気候(凶悪な気候の力)を前にしたヨーロッパの理性の衰弱と屈服を描く。

神経的修正は五感にも影響を及ぼす。熱帯の倦怠のなかではもはや、自然はかつてのように視覚に美しく映ってこない。魅了した色彩もあまりに激烈なために目を悩まし、強烈な光線も耐えがたくなる。熱帯自然の退屈と不快さが露呈する。(118-19)

とはいえ、自然はみなさんを疎外しているわけではない。それどころか、自然は熱病という装いをしてみなさんを迎え入れる。順化のお手伝いをしようというのだ。ハーンのここでの記述は、鮮明かつ詳細である。ある日の午後2時ごろ、ふいの感覚に襲われる。光が怖くなるという奇怪な恐怖だ。ざらざらした光が体のなかに沁みこんで、精神錯乱が起こる。目も痛くなり、眩暈も起こる。なんとか太陽の光から逃れようともがくが、気がつくと自分が寝床に伏していて何も覚えていない。「ただ後頭部が起きていられないほど重い感じで、——脈搏がはげしく打ち、——ときおり目にキリキリ刺すような痛みを感じる。」(121) 痛みは増し、叫び声をあげる。ガタガタ寒気がし神経過敏になる。ここで生まれて初めて大病(熱病)に罹ったと知る。

みなさんの血は変わったのだ。——熱帯の「自然」がみなさんに好意を示してきたのである。「自然」はみなさんをこの土地に住みつかせる準備をしているところなのだ。(121)

体が快復すると熱病によって血が希薄化されただけでなく、五感が敏感に

なつたと感じる。高地に転地し、そこで、一旦は失われたかに見えた熱帯の自然の美しさと楽しさを再び味わうことになる。「つまり、みなさんは、ようやくのことで気候順化したのだ。」(122)そして気候順化することで以前にもまして熱帯自然の魅惑が、あの“frisson”が舞い戻る。太陽の魔法の再魔術化である。

だから、ハーンにとって気候順化とは、生理学的な身体改変(神経の修正、熱病による血の希薄化)の経験であると同時に、五感の変容の経験である。それを測るのは色彩や匂いの楽しさを生き生きと感じ取る審美的・美学的な判断であり、感覚を通した主観的感覚主義的態度(熱帯に対する frisson)によってである。見せかけの美の誘惑から、その幻滅、病を通しての順化と快復、快復後に訪れる真正の美の堪能という一連の流れのなかで、ハーンはフンボルトのような絵画的な熱帯自然の描写がいかにかヨーロッパ中心主義的な錯誤をもたらすのかを語っているかのようだ。気候順化によってもたらされる「より高度な感覚生活」(123)は、ヨーロッパ性という特質(理性、思考、思案)を譲ることでしか手にすることはできない。「ヨーロッパ人種が住みついていたこの熱帯地方に、なぜ科学、芸術、文学がうまれないのか」(118)、それは頭脳を使うことができないからに他ならない。(ここにハーンの西洋中心主義的バイアスを見てとれる。)頭脳を使うこと(思案すること)は、ハーンの友人の例が示唆するように死につながる。(ハーンの友人は大病の後、死亡するが、その理由は思案にあるとされる。「この方、体がよくなるのは、考えごとをなさるからです。」(126-7))「思案が禁物」なのは熱帯で生き延びるための知恵であるが、それは「より高度な感覚生活」との引換券であり、同時にヨーロッパ性の死をも意味するのである。

気候順化と身体改変という観点からみれば、ハーンの記述は教科書通りの過程を描いているといえるが、順化を退化と捉えてはいない。自然はヨーロッパ白人に「好意」をもって順化の手伝いをする。ハーンが描きだす白人の身体改変は19世紀終わりに来て「順化不可能な身体」の可変性を語っている。それは18世紀的な可塑的な身体ではないが、かといって「退化」に向かって下降する人種的なそれでもない。人種の優劣は、ヨーロッパ性(理性・思考)と土着性(感覚)との審美的な交換の儀式的なかでおざなりにされてい

る。穿った見方をすれば、語る主体を一旦「あなたがた」に預け、自らに起こったであろう経験を距離をもって見つめる仕草と、身体の変容過程を事細かに語るハーンの語り口には、自己の身体が気候の崇高ともいえる強大な力によって否応なく変更を被ってしまうことに対するマゾヒスティックな愉悦を見てとれるかもしれない。<sup>31</sup> 熱帯地域とは中産階級の白人男性が、劣等人種や労働者階級、梅毒患者、アルコール中毒者、売春婦、犯罪者、狂人といった「他者」に見出した「退化・変質」の姿を、自己に見出すことができる唯一の身体の実験場であったのかもしれない。しかも、それを「退化」と見なさずに済む安全な身体改変として。<sup>32</sup>

## 2. 日射病——灼熱の太陽、眩い光の恐怖

### 日射病の恐怖

熱帯地域でヨーロッパ人に恐れられていたのは、コレラ、マラリア、黄熱病などの致死的な疫病ばかりではない。それらを生むとされた灼熱の太陽、その熱と光線もそうだ。(ジェフリーズの太陽熱で身体が調理されるイメージを想起。)「日射病」(sunstroke)はその恐怖を物語る最たる形象であった。この節では、19世紀から世紀転換期をへて20世紀に至る日射病の小史をスケッチする。<sup>33</sup>

---

<sup>31</sup> この時期にマゾヒズムが「発明」されたのも関係があるかもしれない。この点に関しては更なる考察が必要である。ジョン・K・ノイズ『マゾヒズムの発明』岸田秀・加藤健司訳(青土社、2002年)参照。

<sup>32</sup> この点に関してはより入念な検証作業が必要となるが、その糸口として熱帯性神経衰弱が熱帯地域においても白人の植民地支配の「義務」を遂行するための一種の代価であり、本国と同様に中上流階級の白人男性のマーカーであった点、土着の人々の狂気とは峻別された点を考慮する必要がある。Anna Crozier, “What was Tropical about Tropical Neurasthenia? The Utility of the Diagnosis in the Management of British East Africa”, *Journal of the History of Medicine* 64.4 (2009): 518-48 (esp. pp. 533); see also, Warwick Anderson, “The Trespass Speaks: White Masculinity and Colonial Breakdown”, *American Historical Review* 102(1997):1343-70.

<sup>33</sup> 日射病に関する歴史はほとんど皆無といい。例外は E.T. Renbourn, “Life and Death of the Solar Topi: A Chapter in the History of Sunstroke”, *Journal of Tropical Medicine and Hygiene* 65 (1962): 203-18 である。ただしレンボーンの関心は日射病予防のための服装と装備にある。

日射病（とおぼしき症状）は古くから認識されていた。聖書のなかでも言及されているし（「太陽に打ちのめされた」、古代ギリシア・ローマではシリウス（dog star）が昇る時期が日射病に最もかかり易いとされ、太陽の熱に打たれることで生じる病や症状を“siriasis”と呼んだ。<sup>34</sup>しかし、温帯地域の北ヨーロッパで日射病がことさら話題に上ることはまれであったし、その症例も少なかったようだ。熱帯地域に進出した白人も当初は日射病を恐れていなかった節がある。19世紀初頭に出版されたウィンターボトムのアフリカ紀行でも日射病はめったにヨーロッパ人を襲わないし、なったとしても病弱な人のみで、しかも、ひどい頭痛ぐらいで治ると、高を括っている。<sup>35</sup>18世紀の熱帯気候の医学ものにおいても、日射病（sunstroke）そのものはほとんど登場しないといい。18世紀の熱帯医学の草分けジェームズ・リンドも、服装の注意事項を記す際に、黒い帽子をかぶるなどの不適切な服装をしながらの炎天下での進行は、「卒中」（apoplexy）に似た症状を引き起こす危険性があるとの記述にとどめている。<sup>36</sup>当時の一般的な医学理論は、太陽の熱によって血液が腐敗し、突然の発汗の停滞など他の要因と相俟って致命的な熱病を引き起こされるとした。<sup>37</sup>つまり、恐れられたのは、太陽そのもの（日射病）というより、熱病を引き起こす要因の一つとしての熱だ。

日射病が独立した項目として立てられるようになったのは19世紀半ば以降になってからのようだ。日射病が医学書のタイトルとして登場するのはようやく1872年になってからである。<sup>38</sup>熱帯地域において、炎天下で行進を続ける兵士たち、無防備な服装で直射日光にあたるヨーロッパ人、換気の悪い蒸し蒸しとしたバラックやテントで雑居する兵士たち、その多くが突然倒れあるいは意識を失い、時には死亡する事例が多数報告され、日射病が脚光

---

<sup>34</sup> Renbourn, p. 203.

<sup>35</sup> T.M. Winterbottom, *An Account of the Native Africans in the Neighbourhood of Sierra Leone*, 2 vols. (London, 1803), vol.2, p.39.

<sup>36</sup> James Lind, *An Essay on Diseases Incidental to Europeans in Hot Climates* (London, 1771), p.251.

<sup>37</sup> John Pringle, M.D. *Observations on the Diseases of the Army, in Camp and Garrison. In three parts. With an Appendix, containing some papers of experiments...* 2<sup>nd</sup> ed. corrected, with additions (London, 1753), p.10

<sup>38</sup> Horatio C. Wood Jr., *Thermic Fever; or Sunstroke* (Philadelphia, 1872)



を浴びるようになった。<sup>39</sup> 日射病についての医学的な統一見解がある訳ではない。「日射病」(sunstroke) という呼び方そのものも不確かだ。「熱射病」(heatstroke) ないしは「熱による熱病」(thermic fever) などとも呼ばれたが、「熱」が強調されるように、大気の高湿多湿状態が日射病の原因とされた。陽光を直接浴びることは日射病の必須条件ではない。夜テントで雑魚寝をしている間に日射病に似た症状で死ぬのはまさにこのためだ。ただし、目に見える症例としては昼間の炎天下での陽光の打撃 (stroke) による日射病が典型的であることに変わりはない。日射病の症状はというと、初期症状として疲労、倦怠、眩暈、吐き気、失禁など神経衰弱の徴候が見られ、症状が悪化すると頭部と目に激しい痛み、視覚障害、胸部の圧迫(強度の息苦しさ)、四肢の麻痺が現れ、落ち着きのなさや神経過敏状態が伴って、悪ければ譫妄の痙攣にも似た状態に陥る。場合によっては、後に見るように狂気に陥り、一旦回復したとしてもトラウマのように病状は繰り返される。当然ながら気候順化に失敗した白人が罹り易い病とされる。<sup>40</sup>

強健な体をもつ若い兵士などの熱帯地域の新参者が日射病の餌食になり易いとは、ほとんどクリシェとなっていた。彼らは太陽をあざ笑い無謀にも頭や体を灼熱の太陽の下に晒しているのだから、このような無知蒙昧な民は日射病という痛いしっぺがえしにあうのは当然だ。<sup>41</sup> 太陽の影響を直ぐには感じないという新参者もいる、が、その恐るべき効果は既に浸透しているのだ。「彼らは太陽を感じないというが……太陽はその時感じていようがいまいが、

---

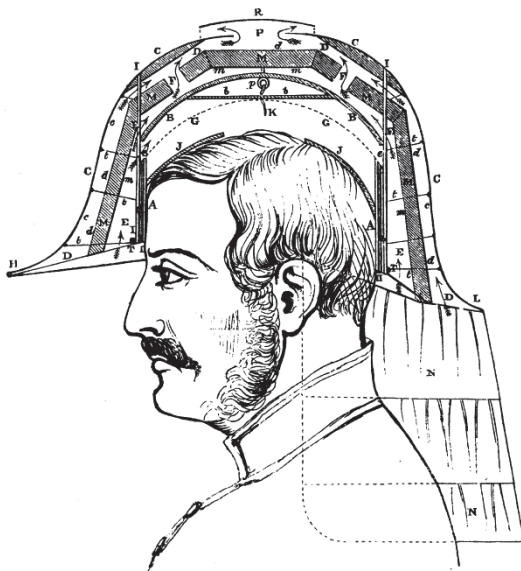
<sup>39</sup> William Pirrie, “On Insolation, Sun-stroke, or Coup-de-Soleil”, *Lancet* (May 21, 1859), 505. Cf. W.J. Moore *A Manual of the Diseases of India*, 2<sup>nd</sup> ed. (London, 1886), p. 357 (“a comparative recent date”).

<sup>40</sup> Pierie, pp.505-06; Alexander Wynter Blyth, *A Dictionary of Hygiene and Public Health* (London, 1876), “sunstroke” (pp.575-76); J.C. Culbertson (ed.), *The Cincinnati Lancet-Clinic* (Cincinnati, 1887), pp.377-81; Leigh Hunt and Alexander S. Kenney, *On Duty under a Tropical Sun* (London, 1882), pp.11-15; C. Handfield Jones, *Studies on Functional Nervous Disorders* (London, 1870), ch.11, “Heat Stroke”; W.J. Moore, *A Manual of Family Medicine for India*, 4<sup>th</sup> ed. (London, 1883), “sunstroke” (pp.396-401); idem., *Manual of the Diseases of India*, ch.20, “insolation” (pp.357-74); Francis Skae, “On Insanity caused by Injuries to the Head and by Sunstroke”, *Edinburgh Medical Journal*, vol 11, part 2 (1866), pp. 687-92; Wood.

<sup>41</sup> Moore, *Manual of Diseases*, p.363; see also Jeffreys, p.2.

体に効いているのだ。ヨーロッパ人はその効果に決して慣れる (seasoned) ことはない。」<sup>42</sup>

日射病の予防策は、端的に日光をさけること、日の光から頭を守ることだが、それには工夫がある。クサムネ (sola) の髄で作られたヘルメット型の「日よけ帽」(solar topi) が 19 世紀後半に取り入れられるが、<sup>43</sup> 直射日光から頭部を守る帽子をかぶりさえすれば日射病を防げるとってはならない。頭隠して尻隠さずで、盲点は襟首 (後頭部) や脊髄にある。<sup>44</sup> 日射病を予防するにはすべからず脊髄部分を覆いで隠さなければならない。日光は脊髄を通して脳にまでその影響を与えるからだ。兵隊のヘルメットの革新的な発案



図版 1

<sup>42</sup> Hull and Mair, pp.63-64.

<sup>43</sup> Dane Kennedy, "The Perils of the Midday Sun: Climate Anxieties in the Colonial Tropics", in *Imperialism and the Natural World*, ed. John M. Mackenzie (Manchester: Manchester UP, 1990), p.120 ("by 1870 the topi...had become part of the uniform of the British sahib in India"); Renbourn.

<sup>44</sup> Hull and Mair, pp.66-67.

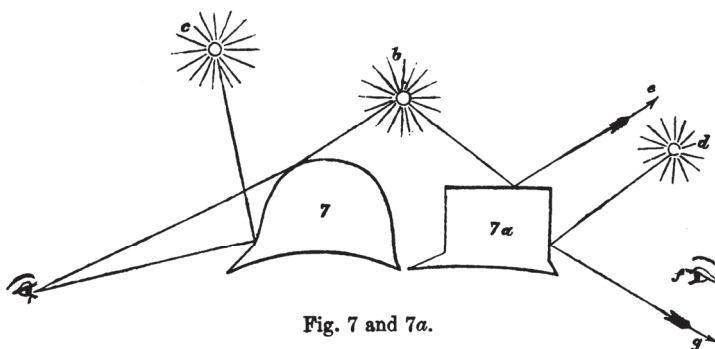


Fig. 7 and 7a.

図版 2

をしたのが、他にもないジェフリーズである。脊椎パッドをヘルメットに取り付ける、通気性をよくし光を反射しにくいヘルメットの材質と形を取り入れるなど、彼の考案は以後の兵隊の装備に大きな影響を与えた。図版 1 は脊椎パッドをつけた兵隊ヘルメットの図案だが、ここでは、太陽光線が反射したときに、近くの歩兵に当たってしまう。(図版 2 参照。) 眩い太陽の光は目を通して脳に伝わるのだから、それをできる限り阻止しなければならない。<sup>45</sup> ヘルメットの形を 7a のようにすることで反射光の角度を変えられ、近くの兵士への影響を減少させられる。更に、目を保護するためにサングラスやゴーグルの使用も検討された。<sup>46</sup>

19 世紀末に日射病に対する最も楽観的な考えが、サンボンによって提示される。細菌学の発展を背景にそれまで主流だった気候と疾病との因果関係(気候病因論)を否定し、マラリヤ、コレラ、貧血、結核などの病はなんらかの「微生物」(parasites)が原因と考えたサンボンは、熱帯の病も同様とし、そうした病を克服すれば気候順化することなく植民地化も可能だとした。驚くことに、サンボンは日射病も太陽の熱による熱病ではなく、コレラなど他の疫病と同じように微生物による「伝染病」(infectious disease)であると

<sup>45</sup> Jefferys, pp. 83-84; Hull and Mair, p.67; Renbourn, p.209.

<sup>46</sup> Collingham, p.89.

した。<sup>47</sup> サンボンの楽観主義は、環境主義を貫いていた熱帯地帯の医学者には受け入れがたく、一般的にも支持者は少なかった。それでも、蚊のマラリア媒介説を提唱し熱帯医学の父と称されるパトリック・マンソン (Patrick Manson, 1844-1922) が、サンボンの楽観主義を部分的に受け継ぎ、19世紀末に「熱帯医学」が創出されると、「熱帯の病」は衛生学と医学を手段にしてある程度阻止できるという期待が高まった。しかし、20世紀初頭には早々とその期待は裏切られることになる。<sup>48</sup> 太陽の恐怖は消えるどころか、ますます深まっていったのだ。1913年にハヴェロック・チャールズがいみじくも指摘するように、「十分な資金と専制的な力を使えば、ある程度は不衛生な環境を正し、熱帯の病の多くを消し去ることができるだろう。しかしながら、金や知識がいくらあっても、太陽の熱と光、その気候条件を変えることはできないのだ。」<sup>49</sup> チャールズは続けていう。高温の気候に長く滞在すれば、「貧血」(anaemia)に特徴的な心身の退化現象がもたらされるだろう。そして、「これは寄生虫の病 (parasitic disease) を抹殺することとは全く別の話なのだ。」<sup>50</sup> 気候は医学では変えられないという身も蓋もない事実が立ちほだかる。

## 太陽光線の「発見」

熱帯医学の発達にもかかわらず 20世紀に熱帯の太陽がその恐ろしさを失うどころか、新たな脅威となった背景には、非常に逆説めくが、太陽光線の

---

<sup>47</sup> L. Westenra Sambon, "Remarks on the Etiology of Sunstroke (Siriasis): Not Heat Fever, but an Infectious Disease", *British Medical Journal* (March 19, 1898), pp. 744-48; idem., "Acclimatisation", p. 590. とはいえ、サンボンは気候病因論を否定しつつも隠れた気候病因論者でもあった。その複雑なサンボン像については、Ryan Johnsonの論文"European Cloth and 'Tropical' Skin: Clothing Material and British Ideas of Health and Hygiene in Tropical Climates", *Bulletin of the History of Medicine* 83(2009): 530-60を参照。

<sup>48</sup> Kennedy, "Perils", pp. 120-21. David Arnold (ed.), *Warm Climates and Western Medicine: The Emergence of Tropical Medicine, 1500-1900* (Amsterdam: Rodopi, 1996)も参照。

<sup>49</sup> R. Havelock Charles, "Neurasthenia, and its Bearing on the Decay of Northern Peoples in India", *Transactions of the Society of Tropical Medicine and Hygiene* 7(1913), p. 12.

<sup>50</sup> Charles, p. 12.

治療的効果の発見があった。限られたスペースで込み入った事情を解説することはできないが、おおよそ次のような経緯である。

太陽光線の治癒力を医学化したのがデンマークの医師フィンセン (Niles Ryberg Finsen, 1860-1904) である。19 世紀後半に X 線や赤外線などの光線 (放射線) が発見され、それらがいかに病気の治療に役立つかが問われだした。1877 年には紫外線が結核のバクテリアを殺傷するとの実験も報告された。それを受けてフィンセンは、1890 年代に行った一連の「光線療法」の実験で、太陽光線の紫外線には殺菌効果があることを発見し、皮膚結核の治療に成功する。(彼はその功績を讃えられ 1903 年にノーベル医学生理学賞を授与された。) 太陽光線や人工的な光には結核や瘰癧などの疾病を効果的に治癒する魔術的な力があるという信念から、「太陽 (光線) 療法」(heliotherapy) と「光療法」(phototherapy) が 1910 年代から 30 年代にかけて流行する。当時の健康改良運動や社会衛生運動 (また優生思想の影響) も相まって自然の太陽の光とそれに体を晒すこと (日光浴) は肯定的な意味をもつようになった。(紫外線を遮蔽するのではなくそれを通すサングラスが開発されたぐらいだ。) <sup>51</sup>

忘れてはならないのは、日光浴をすれば自然と「色素着色」(pigmentation) を起こす、つまり肌が焼けるということだ。「日焼け」(tanning) はヴィクトリア時代にあっては、肉体労働者の可視的な印であったので、上層階級の男女にとってはタブーとされていた。しかし、アウトドアスポーツの流行や (日に当たらない) 工場労働者の増加と農業従事者の減少など日焼けと階級のつながりが次第に弱くなり、逆に青白い肌は貴族的退廃と病的なイメージを喚起するようになると (プラム・ストーカーの『ドラキュラ』を想起)、太陽に対する新しい態度が生まれる。こうして 1920 年代には「太陽崇拜」が登場し、日焼けした肌が健康的で官能的なものになる。太陽療法を含む光線

---

<sup>51</sup> Simon Carter, *Rise and Shine: Sunlight, Technology and Health* (Oxford and New York: Berg, 2007), esp.ch.5; Ryan Johnson, “European Cloth and “Tropical” Skin”; Robert Mighall, *Sunshine: One Man’s Search for Happiness* (London: John Murray, 2008); Tania Woloshyn, “Kissed by the Sun: Tanning the Skin of the Sick with Light Therapeutics, c.1890-1930”, in *A Medical History of Skin: Scratching the Surface*, ed. Jonathan Reinartz and Kevin Siena (London: Pickering and Chatto, 2013), ch.12.

療法は、太陽崇拜ブームに先行する太陽の復権を告げるものである。<sup>52</sup>

太陽光線の治療的効果が謳われた世紀転換期から 20 世紀初頭に、ではなぜ日射病の恐怖、太陽の眩い光への脅威が失われなかったのか。この頃日射病の危険が叫ばれたのは熱帯地域だけではなく、日光浴ブームにのりリゾート化した浜辺においてもである。<sup>53</sup> それは、紫外線などの太陽の化学光線が身体を貫通するとの発見と関係がある。ここで大きな影響力を持ったのがアメリカの軍医チャールズ・ウッドラフの『熱帯光線の白人に対する影響』(1905)である。<sup>54</sup> ウッドラフは光線療法の効果を認め利用しながらも、それが適切に与えられないと(つまり過剰になると)、特にアーリア民族の青白い皮膚(肌)には害になる、それどころか、有色人種のように十全な「色素着色」をしていない白人の体を化学光線は貫通し、「神経原形質」(nerve protoplasm)を破壊しかねない、とした。日焼けは、白い肌を化学光線の害から守るための自然の作法なのである。熱帯気候に長期に渡って住まう黒人は、その進化の過程で、日光の害から身を守るために十分な「色素着色」を生じさせ、光線を貫通させない肌をつくった。よって、白人が罹り易い熱帯の病(日射病も含め)からは免れているとされる。(光線治療においても色素着色は病気に対抗する防御壁と見なされた。)<sup>55</sup> 反対に、色素着色が不十分な白人は光線の害の餌食となる。熱帯気候の熱からはどうにか逃れられるかもしれないが、太陽がある限りその光線からは逃れられない。眩い太陽の恐怖が消えなかったのには、このような経緯があったのだ。<sup>56</sup>

---

<sup>52</sup> Carter, ch.2,3; Steven Braggs and Diane Harris, *Sun, Sea and Sand: The Great British Seaside Holiday*, new ed. (Stroud: Tempus, 2006), “Sun Worship” (pp.49-59); Minghall, ch.4. 文学作品における太陽療法の最も早い例はジッドの『背徳の人』(1902)に見られる。イギリス文学ではD・H・ロレンスの短編「太陽」(1926)にその顕著な例が見られる。

<sup>53</sup> “Sunstroke at the Seaside”, *British Medical Journal* (Aug, 8, 1896), pp.342-43.

<sup>54</sup> Chas. E. Woodruff, *The Effects of Tropical Light on White Men* (New York: Rebman Company, 1905)

<sup>55</sup> Woodruff, pp.83-85ff.

<sup>56</sup> ウッドラフは、日の光にあたるよりも暗闇の方が健康であるという極端な考えまでも提示した。暗闇で働く炭坑労働者は健康で長生きだし、病原菌に晒されているように見える下水溝で働くバリの労働者もしかり。彼らはストリートの労働者のように日光を浴びていないので健康なのだ。こうした事例は、暗闇は不健全というより健全な効果を及ぼしている証拠であるとした。(p.79)

## 太陽と狂気と犯罪と

太陽光線の影響は直接その場で現れる場合もあるが、体を貫通して細胞原形質まで達しそれを破壊するには時間が必要となる。実際、光線と身体変異との間には時間差があることをウッドラフは指摘する。熱帯地域に滞在する新参者は最初のうちは衰弱するどころか、健康が増進したように感じる。性的刺激も同様だ。<sup>57</sup> しかし、見かけに騙されてはいけない。ハーンの記事も思い出そう。太陽光線の効果は段々と判明する。数か月を過ぎる頃になると、体がだるい、神経過敏になるなどの神経衰弱の症状が出始める。光線はとくに神経系統（神経原形質）を侵すので神経がやられる。<sup>58</sup> フィリピンに滞在した経験からウッドラフは既に 1900 年に熱帯の白人がみな大なり小なり「神経衰弱」であることを指摘していた。<sup>59</sup> 彼らが自国にいるよりも高い確率で神経衰弱ないし神経症になることが分かっていた。<sup>60</sup> ウッドラフによって流通するようになる「熱帯性神経衰弱」(tropical neurasthenia) の登場である。<sup>61</sup> もっともハーンの記事にもあったように、熱帯における神経系の衰弱症状は 19 世紀から見られたのであって、それを「衰弱」(prostration)、「消耗」(exhaustion)、「衰退」(debility) と呼ぶか、ピアードによって流行するようになった「神経衰弱」(neurasthenia) と呼ぶかかの差だが、「神経」が用語として使用されるようになったのは、太陽の影響が体液（発汗作用など）から神経系統に大きく移動したことを暗示している。<sup>62</sup> また、寄生虫（微生物）による熱帯の伝染病がある程度コントロール可能なものと見えた時に、統制不能な太陽の光による神経症がクローズアップされたともいえ

---

<sup>57</sup> Woodruff, pp.190-91.

<sup>58</sup> Woodruff, ch.10, “Results of Insufficient Pigmentation” (pp.190ff)

<sup>59</sup> Charles E. Woodruff, “The Soldier in the Tropics: His Food, Alcohol, and Acclimatization”, *Philadelphia Medical Journal* (April 7, 1900): 768-82.

<sup>60</sup> Woodruff, *Effects*, pp.194-95.

<sup>61</sup> Louis H. Fales, “Tropical Neurasthenia and its Relation to Tropical Acclimation”, *American Journal of the Medical Sciences* 133(1907): 582-93.

<sup>62</sup> 例えば以下を見よ。Andrew Balfour, “Problems of Acclimatisation”, *Lancet* 205 (July 14, 1923): 84-88; 総じて熱帯気候の刺激は神経系に打撃を与え様々な精神障害を引き起こす。Hugh S. Stannus, “Tropical Neurasthenia”, *Transactions of the Royal Society of Tropical Medicine and Hygiene* 20 (1927): 327-43. この中に収められた議論のなかで、長い熱帯気候への滞在が神経系を侵すという誰も否定できない事実が議論のベースとされている (p.337)。

る。

実の所、神経の病（＝狂気）は、日射病の病理学の歴史において最も取りざたされたトピックだった。日射病が一般の関心をひかなかった 19 世紀以前でも精神異常の原因の一つに日射病があげられた。例えば、ウィリアム・バティがあげる例は船乗りである。バティは外傷性の狂気の原因の一つに日射病をあげ、ある船乗りの症例を紹介する。「太陽光線が彼の頭に垂直に降り注ぐ瞬間に彼は狂乱状態になった。」太陽光線とその熱射は脳の髄質に打撃を与え、脳の血液が希薄化し狂乱性の熱病を引き起こす。<sup>63</sup> 19 世紀になると、熱帯地域に移動した旅人や移住者の多くが、順化の困難から狂気を発症するようになるが、その原因として第一に日射病があげられたのも不思議ではない。<sup>64</sup> 「クローストン博士が信じるように、熱帯気候でのイギリス人が狂気に陥るのは日射病を置いて他にない。」<sup>65</sup> 幼年時代に熱射病に見舞われれば、「痴愚」(imbecility)は免れない。<sup>66</sup> イギリスから多くの人々が移住したオーストリアでは、日射病と狂気との関係が取りざたされていた。多血質のイギリス人が対極の気候のオーストラリアに移住すれば、刺激過多になり妙にいらいらしたり、逆に消耗しやすくなったりする。神経をやられるのだ。強い日の光は目を通して脳を刺激し（お決まりのパターンだ）「神経消耗」(nervous prostration)に見舞われる。1850 年代にもなると植民地の医師たちはこのような神経衰弱症の主要原因を日射病に求めるようになる。もちろん、アボリジンは脳を守る頭蓋が分厚くできているので日射病からは免れる。<sup>67</sup> ヴィクトリア州は世界で最も多くの狂人の住む地とさえいわれるまでになる。<sup>68</sup>

---

<sup>63</sup> William Battie, *A Treatise on Madness* (London, 1758), p.47.

<sup>64</sup> Jonathan Andrew, "Letting Madness Range: Travel and Mental Disorder, c. 1700-1900", in Richard Wrigley and George Revill (eds.), *Pathologies of Travel* (Amsterdam: Rodopi, 2000), p.50

<sup>65</sup> *A Dictionary of Psychological Medicine*, ed. D. Hack Tuke (Philadelphia, 1892), vol.2, p.1235.

<sup>66</sup> *Ibid.*, p.1234.

<sup>67</sup> Warwick Anderson, *The Cultivation of Whiteness: Science, Health and Racial Destiny in Australia* (New York: Basic Books, 2003), pp.24-27.

<sup>68</sup> Leigh Boucher, "Masculinity Gone Mad: Settler Colonialism, Medical Discourse and the White Body", *Lilith* 13(2004): 51-67, (p.56). オーストラリアにおける日射



こうした狂気と日射病との因果関係は熱帯地域を舞台として 19 世紀の文学にも度々登場する。特にインドを舞台としたキップリングの小説では日射病は白人を狂気に至らしめるクリシェとなる。「王を気取る男」(“The Man who would be King”)では、インドを浮浪する二人のならず者ピーチー・カーナハンとダニエル・ドラヴォットが「カフィリスタン」に王国を建設しようと意気込むが、最終的には反乱の憂き目にあい、王になった男ダニエルが酷い最期を遂げ、ピーチーは命からがら逃れるのだが、頭をやられ精神病院送りとなる。最後の場面で精神病院の院長はピーチーの狂気を日射病に帰している。「彼は日射病にやられて入院したのですが、きのうの朝早く亡くなりました……真っ昼間に帽子もかぶらず半時間もいたっていうのは本当ですか？」と語り手に聞くが、もちろん、日射病の病理診断は便宜的なもので当時のクリシェに従ったまだけだ。<sup>69</sup>

日射病と狂気とを連結させる 19 世紀の逸話の一つに狂気の画家リチャード・ダッド (Richard Dadd, 1817-86) のエジプト旅行がある。1842 年、ダッドが 25 歳の時に彼のパトロンに伴って中東旅行にでかける。最終目的地のエジプトでダッドは狂気を発症するのだが、後に語られるように、日射病が遠因で狂気の引き金を引いたと考えられた。ある暑い日に日射病にやられたダッドは回復したものの、いわばその後遺症として、旅行の興奮で既に「熱された」状態にあったダッドの精神が崩壊したのだと。<sup>70</sup>

20 世紀に入り「熱帯性神経衰弱」が、日射病 (や太陽の熱) による心身の機能不全一般を指す包括的タームとして使われだされると、太陽の光と狂気との関係はますます親密なものになる。1926 年『英国医学誌』に掲載された、熱帯性神経衰弱をめぐる一連の記事を見てみよう。シンガポール氏による「熱帯地方における精神の苛立ちと衰弱」という記事が発端となって、何故熱帯

---

病の偏在については、“Sunstroke in Australia”, *Lancet* (April 6, 1872), p.494 を見よ。

<sup>69</sup> Rudyard Kipling, *The Phantom Rickshaw and Other Eerie Tales* (New Delhi: Penguin, 2010) に所収。邦訳は『キップリング インド傑作選』高橋和久・橋本楨矩訳 (鳳書房、2008 年) 訳はこれに従った。

<sup>70</sup> Patricia Allderidge, *The Late Richard Dadd, 1817-1886* (London: The Tate Gallery, 1974), p.21.

において白人の精神が狂うのかについて議論が展開された。<sup>71</sup> シンガポール氏は友人のオックスブリッジ卒のエリートたちが「神経をやられ」(nervy) 気を狂わせるか死ぬかしたのを目の当たりにしたのだが、それに呼応して、ビルンハースト氏も中国での経験をもとに夏の暑い時期に自殺者が頻出することを指摘する。ぎらぎらとした太陽の光を継続的に浴びることで「熱帯性健忘症」(tropical amnesia) から鬱へそして自死への道を進むのだ。議論の大筋は 19 世紀とさほど変わらないが(太陽光線が目から脳へ入り刺激、予防として帽子やヘルメットの着用など)、自殺、鬱、不眠症、記憶障害といった神経の病の重度さが増している点、原因として熱よりも太陽光線の眩しさやぎらつきが強調されている点に変化をみることができる。例えば、太陽の光は冬でも威力を発揮する、というか雪に反射することでますますぎらつく。冬でも神経衰弱に陥ることもあるとされるのだ。<sup>72</sup>

日射病で精神をやられた狂人は時には暴力的になる。例えば、スキー博士が紹介する例は、インド陸軍に勤務していたG氏だが、彼は日射病によって狂人となり 18 カ月をインドで過ごした後イギリスへ送りかえされる。船上で彼は乗組員を大きな木槌で殴り殺し監禁される。帰国後ロンドンの精神病院へ収容されるが、「命を奪うことは手柄になる」という妄想によって生涯にわたって執拗な殺人衝動をもっていたという。<sup>73</sup>

この時期、天候と人間行動についての気象行動心理学とも言うべき分野が現れる。人間を変えるのは気候だけではない、移ろいやすい天候もだ。特に、酷暑は人を犯罪に走らせる。天候と異常行動の関連性を統計的に分析した気象学者エドウィン・デクスターの研究をベースにしてウッドラフは、暑さと犯罪との関係を明るみに出す。(熱帯の気候は北アメリカの都会においても実現され得る。)デクスターによれば暑い季節に強盗などの異常行動の増加がみられる。<sup>74</sup> (図版 3 参照) ウッドラフがデクスターから引き出しているよう

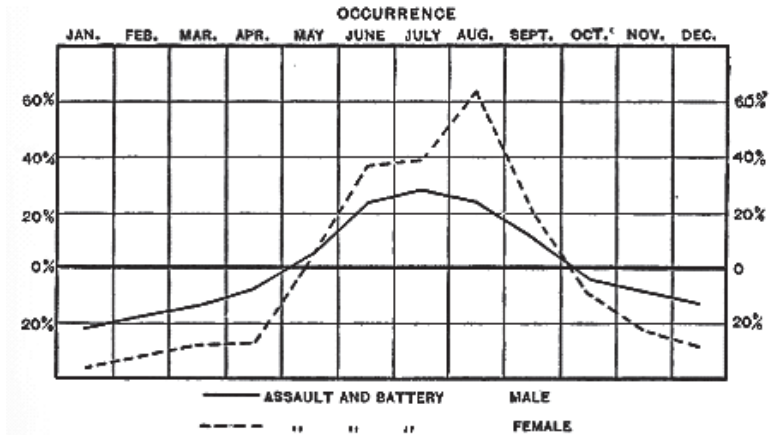
---

<sup>71</sup> “Mental Irritability and Breakdown in the Tropics”, *British Medical Journal* (March 13, 1926): 503-04; (March 27): 596-97; (April 3): 634-35; (April 10): 676; (April 24): 760-61; (May 8, 15): 846-47.

<sup>72</sup> *Ibid.*, (April 3): 634-35.

<sup>73</sup> Skae, pp.690-92.

<sup>74</sup> Edwin Grant Dexter, *Weather Influences: An Empirical Study of the Mental and*



図版 3

に、ニューヨークとデンヴァーでは光の刺激に耐え得るほどの色素着色が生じていないので、太陽の照りが激しい日には光線の刺激から人々は異常行動に走り易い。また、ペンシルヴァニア州では黒人は暑い日でも居心地良く過ごせるのに、白人は暑さで「刺激されいらした精神状態に陥る。精神の安定を失い、通常では抑えつけられていたが、異常な行為を犯してしまうのだ。」<sup>75</sup> このように犯罪率の高さと酷暑との相関関係が太陽を介して結ばれる。

### カミュ『異邦人』——「それは太陽のせい」

ここまでくれば、カミュの傑作『異邦人』を取りあげないという方が無理

---

*Physiological Effects of Definite Meteorological Conditions* (New York: Macmillan, 1904), pp.143-45. 犯罪と天候との関係はロンブローゾの犯罪人類学においても指摘されていた。Cesare Lombroso, *Criminal Man*, translated and with a new introduction by Mary Gibson and Nicole Hahn Rafter (Durham: Duke UP, 2006), p.114.

<sup>75</sup> Woodruff, p.218. J・B・デュボスの『詩画論Ⅱ』(1719)には既に天候と狂気と犯罪との因果関係が記されている。「極度の暑さが苛立たせほとんど狂気にするのも同様に温度のせいである。1年のうちローマで20の悪行があるとすれば15は2カ月の大暑のなかで犯される。」[木幡瑞枝訳、(玉川大学出版部、1985年)、132頁]。

というものだ。熱帯気候の白人を描いたにしては遅まき（初版 1942 年）であるという点や舞台がアルジェリアというフランスの植民地であることは、確かに論証の手を鈍らせる部分ではある。にもかかわらず、これまでのお膳立てはまさに『異邦人』のためにあったのだと思わせる。『異邦人』において「太陽」とその病（日射病）はあまりにも明示的すぎて、逆に批評家の視界に入っていない。それはあたかも、ポーの「盗まれた手紙」のなかの、そこにあるのに誰も気がつがな手紙のような位置を占めている。昨今のポストコロニアル批評の分析はなるほど、植民地主義の言説をテキストに読みこんではいる。名もなきアラブ人が何のためらいもなく殺害されるという行為にフランスが過去に行った暴力行為を読みこんだり、泉をめぐる闘争はまさに領土掠奪の寓意だと解釈したりだ。<sup>76</sup> しかし、「それは太陽のせい」というムルソーの言葉は、植民地的現実を棚上げにする不条理な言い訳か、せいぜいが存在論的優先権の主張のために使われる道具立てに貶められている。熱帯気候における白人の身体改変の歴史を見てきた我々にとって、「それは太陽のせい」という文言は文字通り読まなければならない。

『異邦人』の第 1 部はムルソーがアラブ人を殺害するという大団円で幕を閉じる。第 6 章はそのハイライトともなる場面で詳細にみる必要がある。ムルソーは友人のレエモンと恋人のマリイと一緒にレエモンの友人のマソンのヴィラで日曜を過ごそうと誘われる。当日の日曜ムルソーは目覚めが悪く頭痛もする。それでも、ムルソーはマソンのヴィラに到着した後の午前中、浜辺に行き海水浴と日光浴を楽しみ、「太陽によって爽快になるのを感じる」

(54)。先に見たように、30 年代は既に太陽崇拜のブームから海辺での日光浴は定番となっていたし、カミュの太陽に対する賛歌——官能性と無垢性——からして、海と海水浴と陽光を官能的に味わうムルソーが積極的な意味で太陽の申し子であることは間違いない。しかし、それは陽光が適度な限りにおいてである。泳ぎつかれたムルソーは「マリイの体のほてりと、太陽の熱との

---

<sup>76</sup> フランス語文献には明るくないが、概要は以下にまとめられている。三野博司『カミュ『異邦人』を読む——その謎と魅力』（増補改訂版）（彩流社、2011 年）、235-58 頁。英語文献の最も有名なものは、Edward Said, *Culture and Imperialism* (New York: Knopf, 1993)；邦訳、E・W・サイード『文化と帝国主義 1』大橋洋一訳（みすず書房、1998 年）、「カミュとフランス帝国体験」。

せいで」うとうととする。(54-55) 11時半の食事の後、ムルソーはレエモンとマソンと3人で浜辺に散歩にでかける。アラブ人との邂逅(喧嘩)が起きる場面だが、太陽はムルソーのそばを離れない、というよりしつこく付きまとう。「太陽の光はほとんど垂直に砂のうえに降りそそぎ、海面でのきらめきは堪えられないほどだった。」太陽はもはや受容度の限界を超え、官能と快楽よりも苦痛と倦怠を与える。「私は何一つ考えられなかった。帽子なしの頭に直射する太陽のおかげで、私は半分眠ったような状態だったから。」(56) 太陽の光と熱によってムルソーは再三うとうとし思考能力を奪われる。ハーンの「思案は禁物！」のなかの衰弱経験のように。この太陽はもはや生命の横溢の太陽ではない。生命を脅かす致命的な太陽だ。ムルソーの名(Meursault)が、「死」(meur/mort)と「太陽」(soleil)の合成からなっていることも指摘しておこう。(ちなみに、この直後にアラブ人が登場するのだから、太陽とアラブ人は換喩的な関係にある。)

生命の太陽が限界を超え死の太陽となって以来(というかそれ以前からもというべきだが)太陽はムルソーにべったりと付きまとい彼から離れようとしない。レエモンがアラブ人との喧嘩で腕を怪我した後、午後1時半ごろ(時間が詳細なことにも注意)レエモンと再び散歩に出かけ、長い時間、浜辺を歩く。またしても太陽はムルソーの前に立ちほだかり(「太陽はいま圧倒的だった」)、ここから本格的に太陽との格闘がはじまる。<sup>77</sup>一旦ヴィラの前まで戻ったムルソーだが、「陽のひかりにやられて、頭ががんがんし」、中に入るのが億劫になった。しかし、ここにじっとしているのもままならない。「空から降って来るきらめくような光の雨にうたれ…堪えらぬほどの暑さだった」(61)からだ。という訳で、再び浜辺に歩き出す。つまり、ムルソーは太陽に逃げ道をふさがれてどうしようもなくなって浜辺に向かったということになる。「ここに残っていても、出掛けて行っても、結局同じことだった」(61)。海辺には灼熱の太陽が待ち受けているのだから、ムルソーは太陽の熱や光から逃れられない。八方ふさがりである。

---

<sup>77</sup> ちなみにここでレエモンからピストルを引き取ることになるのだが、そこでも太陽が介入する。「レエモンがピストルを私に渡すと、陽のひかりがきらりとすべった。」(60)

私はしずかに岩の方へ歩いて行ったが、太陽のために額がふくれあがるように感じた。この激しい暑さが私の方へのしかかり、私の歩みをはばんだ。顔のうえに大きな熱気を感じるたびごとに、歯がみしたり、ズボンのポケットのなかで拳をにぎりしめたり、全力をつくして、太陽と、太陽があびせかける不透明な酔い心地とに、うち克とうと試みた。(61)

この場面は比喩的にはアラブ人と対決を予示しているが、文字通りには日射病の症状に抵抗しているように読める。実はその日の朝からムルソーは陽光に打たれている。「もうすっかり明るくなった陽のひかりがまるで平手打ちのように、私を見舞った。」(50) ここではまだ平手打ちで済んだのだが、垂直に振り下ろされる真昼の太陽光線に打たれ続ければ頭がぼうとし、日射病の症状たる眠気と感覚・思考麻痺の状態に陥るのは必然といえよう。

この直後にアラブ人と再び遭遇し、殺人の場面へと進む。ムルソーとしては既にことは済んでいたと思っていたのだが、アラブ人が太陽と共に待ち受けていた。「同じ太陽、同じ光がそそいでいた。もう二時間も前から・・・」(62) アラブ人を殺害する直前の次の場面はムルソーをして常軌を逸した犯罪行為に追い込んだのがいかなる「太陽」なのかを語っている。

陽の光で、頬が焼けるようだった。眉毛に汗の滴がたまるのを感じた。それはママンを埋葬した日と同じ太陽だった。あのときのように、特に額に痛みを感じ、ありとあらゆる血管が、皮膚のしたで、一どきに脈打っていた。焼けつくような光に堪えかねて、私は一歩前に踏み出した。(62)

光に堪えかねて一歩前に踏み出したムルソーに対して、アラブ人は剣を抜きその刃に陽光が反射してムルソーの目を打つ。「太陽をふりはらう」かのように(太陽とアラブ人の換喩的關係に注意)ムルソーはピストルでアラブ人を射殺する。(63) ということは、ムルソーの異常行動の導き手となったのは太陽の光(陽光)であることになる。しかもその太陽はムルソーの母の死と

関連する、というか同じ太陽とされる。一体どのような太陽なのか。(答えは既にお分かりだろうが、その答えを確かめるためにも最後の手続きを踏んでみよう。)

実は、第1部の6章(アラブ人殺害)と1章(ママンの埋葬)は二つの「死」を介して合わせ鏡のように構成されている。1章は、母の通夜のために養老院へ向かう場面から始められているが、ムルソーは午後2時のバスに乗っている。(6) この時間は6章の最後でアラブ人を殺害する時間とほぼ重なる。しかも、バスに乗ったのはいいが「ひどく暑く」(6) ムルソーは始終「眠り続け」る。(7) 次の死体置き場の場面は、ひたすら「光」と「暑さ」と「眠気」と「疲労」のオンパレードである。「部屋には午後の終わりの美しい光があふれていた」「そして睡気がひた寄せて来るのを感じた」(10)、「野原は暑い、この国では特に暑い」(11)、「急に光がはねかかって来て、眼が見えなくなった」(12)、「光のきらめきが、私を疲れさせた」(12)、「よけい白い光にきらめく」「このまばゆい光になかへ」(13)、「眠くはなかったが、疲れて」(14)「それからまた私は眠った」(15)。光は自然のものだけでなく人工的な光も含まれるが、カメラレンズのようなムルソーの眼<sup>78</sup>に光が差し込み痛み、疲れさせ、暑さと共に眠気を誘う。ムルソーは以後も光の刺激に対する眼の疲れに非常に敏感である。2章でも夜の街頭の光が彼の眼を疲れさせている。「私は眼が疲れるのを感じた。」(26) 6章ではアラブ人の刃に反射した光がムルソーの眼をえぐり、結果ピストルの引き金を引く。ここに熱帯性神経衰弱の症状の一つにあげられる「光恐怖」(photophobia)を想起してもよいだろうし、ハーンの光が怖くなるという奇妙な恐怖を想起してもよい。日射病の原理である、目から入る光の刺激が脳に伝わり神経組織を侵し疲労と衰弱を生むというお決まりのパターンを想起してもよい。いずれにせよムルソーの心身は酷暑熱帯によって病んでいる。それでも最悪の太陽が猛威をふるうのは次の場面だ。

次の日、ママンの葬儀である。日は昇り切り(15)「太陽はいよいよ上がり」(16)大地を温め出す。葬列時には「陽の光が満ち」、それは「大地にの

<sup>78</sup> 野崎敏『カミュ『よそもの』きみの友だち』(みすず書房、2006年)、51頁。

しかり」「暑さは急速に増した。」(18) 喪服を着ているのだから当然ながら「暑かった」。(18) 次の印象的な文章は太陽の過酷な非人間化(疎外)の様を簡潔に言い表している。

今日、あふれるような太陽は、風景をおののかせ、非人間的に、衰弱させていた。(19)

太陽が早足で空に昇り、汗が額を流れる。(19) 6章の浜辺の場面で陽光が堪えがたくムルソーを打ちつけ袋小路においやったように、葬儀の行列においてもムルソーの「周囲は、相も変わらず、陽の光の満ちた、どこまでも同じ輝かな野原だ。空のきらめきは堪えがたい。」(20) 太陽の高熱はタールを溶解させどろどろにする。喪服の黒とタールの黒、車の漆黒の色といった「色彩の単調さ」によって「頭がすこしぼんやりし」、太陽、ニスの匂い、通夜の疲労などすべてがムルソーの「視力と思考とを乱した。」(20) ついに、彼は一つの記憶を残しては記憶喪失状態に陥る(「もう何も覚えていない」(20))。6章の浜辺の場面のように灼熱の太陽の直射攻撃によって朦朧とし思考も感覚も麻痺したムルソーは、熱帯性神経衰弱の脳障害の徴候である「熱帯性健忘症」(tropical amnesia)を呈している。<sup>79</sup> 彼が覚えているただ一つの記憶とは看護婦の言葉だが、見事にムルソーの病状の原因を言い当てている。

「ゆっくり行くと、日射病 (insolation) にかかる恐れがあります。けれども、いそぎ過ぎると、汗をかいて、教会で寒気がします」と彼女はいった。彼女は正しい。逃げ道はないのだ。(21)

6章の浜辺の散歩の場面で灼熱の太陽と眩い光によって逃げ道をふさがれたムルソーの苦境とうまく対応する(「逃げ道はない」とともに、この太陽がまさに6章でアラブ人を殺害せしめたあの同じ「太陽」なのだ)と分かる。

まとめよう。ムルソーの身体は、酷暑熱帯の太陽に、その光と熱に神経を

---

<sup>79</sup> Woodruff, pp.197-98; *British Medical Journal*, (March 27, 1926), p.596.



やられ衰弱・消耗し、精神混乱をきたし、時には狂気とかし異常行動に走る白人の身体の末裔である。日射病にかかった白人の身体は、気候順化することなく（あるいはその困難のなかで）熱帯の気候（大地）から疎外された「よその」のそれである。ムルソーはアルジェに生まれ育ったことからして確かに普通のフランス人とは違う。パリの白人の肌の白さと自分の日焼けした肌（太陽に焼かれた印）を対比してもいる。彼はアルジェに住まう「フランス人」でも「アラブ人」でもない「よその」であるが、そのこと自体がムルソーの異邦人性を保証している訳ではない。我々の観点からすれば、ムルソーの身体は熱帯気候に移住した2世代か3世代後の「退化した」ヨーロッパ人（白人）のそれであり（だから肌の色が違う）、つまりは、熱帯地域への滞在が長いだけに気候の凶悪な力によって身体と精神が変更を被ってしまうあの「白人」の身体なのだ。<sup>80</sup> 白人の身体を脅かし続けた熱帯の灼熱の太陽によって疎外されたヨーロッパ人、ムルソーに「よその」性があるとすればそこにこそ求めなければならない。とすれば、ムルソーが殺人の動機を「それは太陽のせい」とした時——この言葉を発した時、またしても暑さで頭がぼんやりしていた（106）のだが——この言葉はカミュ文学の不条理性を代理表現するものではなく、ムルソーがまさに熱帯の「太陽の論理」に忠実であったことを告白する言葉と解さなければならない。

それでは、どうして「太陽」は「盗まれた手紙」のように目の前にあるのに気付かれないのか。その答えの一つは恐らくカミュのエクリチュール（書き方・書記法）にある。『異邦人』の文章からアルジェの酷暑熱帯気候の「熱度」はどうも読者には伝わってこない。それはハーンの熱帯の紀行文と比較しても明らかだ。もちろん、西インド諸島や東インドの高温多湿の熱帯気候と比較的穏やかで乾いた空気のアルジェリアの熱帯気候とは違うし、20世紀も半ば近くになれば、人が幾分住みやすくなっているに違いない。しかし、それらを差し引いても、カミュの文章は妙にクールで中立的でムルソーのカメラアイのごとく透明である。言い換えれば、カミュの文章から「熱度」は

---

<sup>80</sup> Cf. Robert W. Felkin, "On Acclimatisation", *Scottish Geographical magazine* 7(1891), p.654, "their [Europeans] children in a generation or two receive an indubitable impress from the climatological factors around them".

感じられない。ここでロラン・バルトのカミュ批評を思い起こしてもよい。バルトはカミュの文章を「零度のエクリチュール」と呼んだのだったが、我々の観点からすれば慧眼だったと言わざるを得ない。<sup>81</sup> はからずも「熱度」の隠喩を使ったのだから。そう、『異邦人』のエクリチュールは「零度」であり、直ぐそこにある熱気をすぐさま消してしまうのだ。酷暑熱帯の「暑さ」は巨大な冷凍エクリチュール装置によって瞬間凍結され、物語はその土壌でのみ展開しているかのようだ。「太陽」の歴史はこのように無色透明化され、人間の不条理という存在論的主張が頭をもたげるのだ。

カミュはおそらく熱帯アルジェの気候に興味を持っていたに違いない。というのも、『異邦人』が書かれるちょうど前にカミュはアルジェ大学付属の気象学研究所に勤務していたからだ。1937年12月から翌年の9月末までこの研究所でカミュは過去25年間の気象データをカードに分類する作業にいそしんでいた。このカードは1946年出版の『アルジェリアの気候』という本のデータの一部として使用され、「カミュ・カード」として今でも保管されている。<sup>82</sup> 気候に関心を持つようになったカミュが太陽と日射病と殺人をひらめきのごとく結びつけたのも偶然ではなかろう。カミュは日射病の予防について細かい点でもこだわっている。喧嘩っ早いレエモンがなぜムルソーのようにアラブ人を殺害するには至らなかったのか。笑い話のように聞こえるが、それはレエモンが「帽子」をかぶっていたからに他ならない。カミュはレエモンに「カンカン帽」をかぶせるのを忘れなかった。(31) それに対してムルソーはというと、1章でも6章でも「帽子」をかぶっていない。「帽子をもたなかった」(19)、「帽子なしの頭」(56))。この差は歴然としている。「帽子なしの頭に直射する太陽」(56)によって片や日射病にかかったのだから。ムルソーの無謀さとカミュの注意深さに敬意を表すべきである。

---

<sup>81</sup> ロラン・バルト『零度のエクリチュール』石井美子訳（みすず書房、2008年）。

<sup>82</sup> H・R・ロットマン『伝記 アルベール・カミュ』（1982年）、188—89頁。